

沈從文『辺城』論（二）

黃 媛 玲

五 白塔と義渡

『辺城』の中でひととき印象の鮮明な建造物が、老人と少女の家の裏手に立つ、あの白い塔である。物語の書き出しに「川のそばに小さな白い塔がある」と、ごく簡単な説明があるほかは、物語の進行中でも、翠翠らの居場所を示す標識としての役割を果たすのみで、老人と少女の素朴平和な生活に似つかわしい静かで明るい背景であった。しかし、物語のクライマックスにおいて、大雨が襲来した夜に大きな落雷とともに倒壊するに至り、その存在が主人公たちにとって特別であることが明らかになる。

醒來時天已亮了，雨不知在何時業已止息，只聽到溪兩岸山溝裏注水入溪的聲音。翠翠爬起身來看看祖父還似乎睡得很好，開了門走出去，門前已成為一個水溝，一股濁流便從塔後嘩嘩的流來，從前面懸崖直墜而下。並且各處皆是那麼一種臨時的水道。屋旁菜園地已為山水衝亂了，菜秧皆掩在粗砂泥裏了。再走過前面去看看溪裏一切，纔知道溪中也漲了大水，已滿過了碼頭，水脚快到茶缸邊了。下到碼頭去的那條路，正同一條小河一樣，嘩嘩的洩着黃泥水。過渡的那一條橫溪牽定的纜繩，已被水淹去了。泊在崖下的渡船，已不見了。

翠翠看看屋前懸崖並不崩坍，故當時還不注意渡船的失去。但再過一陣，她上下搜索不到這東西，無意中回頭一看，屋後白塔已不見了，一

驚非同小可。趕忙向屋後跑去，纔知道白塔業已坍倒，大堆磚石極凌亂的攤在那兒，翠翠嚇慌得不知所措，只銳聲叫她的祖父。祖父不起身，也不答應，就趕回家裏去，到得祖父牀邊搖了祖父許久，祖父還不作聲。原來這個老年人在雷雨將息時已死去了。

雷雨の夜が明けた朝、門の外に出た翠翠は、大雨によって変わってしまった景色を目にする。家の前は溝となり、濁流がざあざあと音を立てて山から崖のほうへ流れ落ちていく。家のそばの野菜畑が山からの水に荒らされ、野菜の苗が土砂に埋もれている。川が増水し、渡し場が水没してしまっている。様々な水の音が聞こえ、空気清澄さすら感じられるほどの取り澄ました筆致は、翠翠が極めて落ちついた態度でこの自然のもたらした災害を観察し、それほど動いてもいないように感じられる。しかし、白塔の姿が消えてしまったことにはと気づいた途端、「その驚きは並み大抵なものではなかった」。大急ぎで白塔の元へ駆けていき、塔が乱雑な煉瓦と石の山となって崩れ落ちているのを発見して、うろたえ驚くあまり、ただ金切り声を張り上げて、お祖父ちゃんを呼ぶばかりであった。いつもただそこに立っているだけの白塔が、翠翠にとって、極めて大切な存在であったのがこの時に初めて分かる。返事をしないお祖父ちゃんに知らせるために家に戻った翠翠は同時にまた、お祖父ちゃんが夜のうちに死んでいたという悲しい事実と直面するのである。

身寄りがなくなった翠翠に様々な人から援助の手が差し伸べられ、彼女は少しずつ立ち直っていく。そして、白塔は茶峒の人々によって再建される。

碧溪峒の白塔，與茶峒風水有關係，塔圯坍了，不重新作一個自然不成。除了城中營管，稅局以及各商號各平民捐了些錢以外，各大寨子也有人拿冊子去捐錢。為了這塔成就並不是給誰一個人的好處，應儘每個人來積德造福，儘每個人皆有捐錢的機會，因此在渡船上也放了個兩頭有節的

大竹筒，中部鋸了一口，儘過渡人自由把錢投進去。

茶峒の人々にとって、白塔は「風水」に関わるものなので、新しく建立しないわけにはいかない。城内の兵營、税務署、商店、平民が寄付金を出し合うほか、近辺の村落でも寄付を募っており、渡し船の上でも竹筒の募金箱が置かれる。なぜなら、白塔の建立は、誰か特定の人に幸福をもたらすためのものではなく、むしろすべての人に「積徳造福」（徳行を積むことによって、後世に幸福をもたらす）の機会を与えるためのものだという。つまり、塔は、徳行を具現化したものである。翠翠の驚きは、神への畏怖にも似たものである。

ところで、子孫の幸福に影響を及ぼすと考えられる「風水」についての正しい考え方を、沈從文は物語の中で、老人と二老（翠翠に想いを寄せる兄弟のうちの弟雛送）の会話を借りてあらかじめ織り込んでいた。

那二老說：「伯伯，你到這里見過兩萬個日頭，別人家全說我們這個地方風水好，出大人，不知為什麼原因，如今還不出大人？」

「你是不是說風水好應出有大名頭的人？我以為這種人，不生在我們這個小地方，也不礙事。我們有聰明，正直，勇敢，耐勞的年青人，就夠了。象你們父子兄弟，為本地方增光彩已經很多很多！」

「伯伯，你說得好，我也是那麼想。地方不出壞人出好人，如伯伯那麼樣子，人雖老了，還硬朗得同顆楠木樹一樣，穩穩當當的活到這塊地面，又正經，又大方，難得的咧。」

「風水」の良い地方に偉大な人物が生まれるという考えが一般的だったようだ。なぜ茶峒には偉人が現れないのかという若者の問いに対し、老人は、「偉人」の意味が「名の通った人」というのであれば、小さな田舎町には、偉人は必要ではなく、あなたたちのような聡明で正直で勇敢でよく働

く若者がいれば充分だと答える。二老も自分は同じ考えで、悪者はいなく善人が多いのが何よりも大切であり、年取ってもクスノキのように頑強に生きる老人がいてこそ有り難いと応える。沈従文の反英雄崇拜の考え方がここでも反映されているが、これは、戦争について論じた孟子の有名な言葉「天時不如地利,地利不如人和」¹を連想させ、亡国の危機に瀕している1934年当時の状況にあっては、地の利よりも、人の力の大切さを沈従文が訴えているように思える。土地の人々の誇りに訴える言葉は、翠々が口ずさんだ神巫の「迎神」の歌詞にも強く表現されていた。

中国の諺には、「救人一命勝造七級浮圖」（人の命を救うことは七重の塔を造るにも勝る）というのがある。周作人のエッセイ「十字街頭の塔」²（1925年2月『語絲』15期）にも引用されている諺だが、二老が茶峒の人々に称賛され、女性たちの憧れの的になっている理由は、白鷄関での船事故で3人もの人命救助をしたことであった。つまり、最大の徳行は人の命を救うことであり、そのためには、身体的な健全さに加え、「勇」という高い人間性が必要なのである。二老はその理想像ともいうべき人物である。

さて、ここで沈従文が『辺城』の舞台を茶峒に置き、渡し場の傍に白塔を設定した理由について詳しく考察していくことにしたい。劉西渭の批評は、その理由を驚くほどの正確さで捉えながら、詩のような均斉の取れた対句で簡潔に言い表している。

在邊城的開端，他把湘西一個叫做茶峒的地方寫給我們，自然輕盈，那樣富有中世紀而現代化，那樣富有清中葉的傳奇小說而又風物化的開展。³

劉西渭は、『辺城』が茶峒の風物で始まっていることについて、「中世に富んでいるが現代的」と言った。その由来を知るには、厨川白村の評論を訳出した魯迅の『出了象牙之塔』（1925年12月出版）に収められた「從藝術到

社会改造－威廉摩理思的研究－」⁴という一篇に注目すべきである。

この評論の中で、豊かな生活条件に恵まれ詩と美術の制作に没頭するだけであったウィリアム・モリスが、40歳という年を過ぎてから、「象牙の塔」を出て社会の改革に果敢に挑んだことが詳しく紹介されている。モリスは、機械文明に支えられた近代的営利主義Commercialismの功利唯物的風潮に抗して、上品で風韻の高い図案や模様や美しい色合いを創り出すために時間と労力をかまわず、値段に頓着しない本当の工芸美術の自由な制作を提唱し、現代ヨーロッパ一般の美術趣味に一大革新を促した。モリスは、機械万能の資本主義のもとでは、労働者は労働を通しての創造・創作の自由からくる喜びがない不幸な状態に置かれているとして、「すべての仕事はこれをするだけの値打ちがある。仕事をすれば何の報酬はなくとも、為すというだけで快樂である」ということを社会改造の根本とした。そして、モリスがCommunismの理想郷を描いた小説『無何有郷消息』（原題は*News from Nowhere*、現在の和訳名は『ユートピアだより』）では、「對於好的工作也沒有報酬」（「良き仕事に対しても報酬はない」）のであり、煤烟が空を蔽うロンドンではなく、中世の都「泰晤士的清流，迴繞著碧綠の草地，微微地皓白晴朗的倫敦」（清きテムズの流れ、緑の園生を囲んで、ささやかに白む清らかなロンドン）であった。しかし、ラスキンやラファエロ前派の芸術家たちのような同時代の他の中世崇拜者に比べ、モリスの理想郷は、實際的で社会的、英国化近代化しているとして厨川白村は評した。

魯迅によって紹介されたウィリアム・モリスの『無何有郷消息』は、1930年2月に林徽音の翻訳により『虚無郷消息』⁵の書名で出版されているので、沈從文がこれを読む機会があったと思われる。この小説で、社会改革派の主人公が夢の中で突然分け入った中世の如きロンドンで最初に出会ったのは、テムズ川のボートの若い船頭で、その社会では仕事に報酬を払う必要はなく、現代の醜い貨幣は博物館行きにも値しない代物とされている。

沈従文はのちに自ら1936年版『辺城』に書きつけをし小説中の言葉に注釈を施している。⁶「渡頭為公家所有」（渡し場は公の所有である）という個所にわざわざ、「義渡」であって、「官渡」ではないと説明している。沈従文が「義渡」にこだわっていることが分かる。古来、中国には様々な社会福祉事業があったが、私財を投じて造った公益のための設備を名づけるのに「義」の字を使った。「義学」「義倉」「義田」「義井」などとともに、「義渡」というものもあった。丁光『慕雅徳眼中的晚清中國（1861—1910）』で紹介された、イギリス人宣教師 Arthur Evans Moule が1865年に寧波から杭州に向かう途中で利用した「義渡」についての回想がこの制度の具体例を示している。それによると、錢塘江の渡し船は料金を取ってはいけないことになっている。当時の杭州の郷紳や寧波・紹興の商人、海関・塩政局の役人、そして有名な金融両替商人がこぞって「義渡」に寄付をし、杭州市民、とりわけ貧しい人々のために乗船の利便を提供した、という。⁷

清流、緑豊かな自然環境、料金を取らない渡し船、はたまた分け合い、助け合う幸福そうな人々。詩情豊かな内容の『辺城』の物語の始まりは『ユートピアだより』の中世の理想郷となんと似ていることか。とすれば、『辺城』の白塔は「象牙の塔」の化身である。『辺城』の物語は、「象牙の塔」の外の世界、学問とは縁遠い人々を描いたものである。文字を識らない人々の、自然と一体化した音と色の豊かな桃源郷をわれわれに描いてみせたものである。

『辺城』の白塔について、胡泳の「閲読的未来」⁸という一文が示唆に富んだ説明をしている。魯迅が「門外文談」（1934年8月～9月『申報・自由談』発表）⁹で、文字が特権階級の所有物であるために尊厳性と神秘性を持ち、そのために、巷の至る所の壁に「敬惜字紙」（字を書いた紙を尊敬し大切にせよ）と書いた屑籠がかけられていると述べていることを引用したうえ、沈従文の『辺城』の始まりと終わりに登場する白塔が彼の故郷鳳凰の沱江

の畔に立つ白い塔からイメージを取ったのではないかと推測している。

沱江邊の白塔，其中一面題有“敬惜字紙”四個字——原來白塔是焚燒字紙用的。它叫萬名塔，始建于清嘉慶年間，原為古時的“字紙爐”。

“字紙爐”，又有稱“惜字亭”、“化字爐”、“聖跡亭”、“敬字亭”、“敬聖亭”、“文筆亭”的，名稱各不相同。除出現在街頭坊里外，各地的書院、文廟或較重要的廟宇中也可見它的蹤跡。它的形式、大小儘各不同，有的高及數丈，有的不及五尺。但不管如何都會題有“敬惜字紙”四個字。

這些專為焚燒字紙而建的亭子，不少都祀有倉頡的神位（傳說中的倉頡，是中國字的創造者，惜字之餘自然要敬聖）。……華夏民族一直把倉頡造字引為自豪。

その白い塔の一つの面には、「敬惜字紙」と書いてある。18世紀前後に建てられたもので、もとは紙を燃やすための炉（供養塔）であった。このような塔は、「惜字亭」「化字爐」「聖跡亭」「敬字亭」「敬聖亭」「文筆亭」と、様々な名称があり、町のあちこちにあるばかりでなく、各地の書院（公私立学校）、孔子廟や重要な寺院などにある。形式や大きさは様々で、10メートル以上のものもあれば、1.5メートルにも満たないものもある。どんなものであれ、必ず「敬惜字紙」の4文字が書いてある。これらの紙の供養塔には、中国文字を発明したという倉頡が神様として祭られていることも多い。文字を尊重するからには、聖人も尊重するのである。中華民族は、昔から文字を発明したことを誇りとしてきた、と胡氏は述べている。

沈從文は『辺城』においてのみでなく、彼の多くの郷土を描いた作品において、文字の読める読者に文字を識らない人々に対する理解と愛情を広めようとしたが、魯迅のように知識人と非知識人を対立させて考えてはいない。その証拠に、沈從文は、あらゆる分野の英知を集約することのできる社会システムこそが新しい中国に必要であるとし、自分は「主義」よりも「知識」を重んじ、武力による革命に賛成しなかったと、中華人民共和

国建国後に書かされた数多くの自己批判文の中で繰り返えし自身の信条を告白している。¹⁰つまり、『辺城』の白塔は、「象牙の塔」のような負の意義はなく、文字（学問と知識）を尊崇する中国文化の象徴でもある。

もう一つ、『辺城』の始まりの場面設定で、沈從文が取材したのは、中国の国民的文学ともいべき『紅樓夢』である。劉西渭が「清朝中葉の伝奇小説を風物化した」と言ったゆえんである。『紅樓夢』第五回、夢の中で「太虚幻境」を訪れた賈宝玉が、彼を取り巻く女性たちの悲劇的な行く末を暗示する詩や歌の数々を見せられ聴かされるが、一向に悟ることができず、仙女から雲雨の伝授を受ける。次の日を迎え、甘美な恋愛にまだ酔いしれているうちに外に出てみると、当りは一面にいばらが生い茂り、虎狼は群れを為し、ゆく手には一筋黒々と谷川が道を遮っていて、渡ろうにも橋一つかかっている。その危ない谷川「迷津」から引き返すよう引き止められるも間に合わず、賈宝玉は「迷津」の中からわき起こる雷鳴とともに、夜叉と海鬼によって「迷津」に引き下ろされてしまう。「迷津」の様子は、次のようになっている。

深有萬丈，遙亘千里，中無舟楫可通，只有一個木筏，乃木居士掌舵，灰侍者撐篙，不受金銀之謝，但遇有緣者渡之。¹¹

深さは万丈、川幅なら千里にもおよび、舟では渡れませぬ。木の筏だけ一つあって、木居士が舵をとり、灰侍者が棹をさし、金銀の謝礼を取ることなく、有縁の者だけを渡してくれる。¹²

「当り一面にいばらが生い茂り、虎狼は群れを為し、ゆく手には一筋黒々と谷川が道を遮っていて、渡ろうにも橋一つかかっている」とは、内戦と亡国の脅威におびえる当時の中国人の眼前に広がる風景にも似ている。「迷津」は恋愛に夢中になっている若者への警鐘である。『紅樓夢』の現代的意味を読みとった沈從文は、やがて外敵が襲来する民族の大悲劇に立ち向かい、危険な川を渡る船の舵をとるのは、頑強な体と勇敢な精神をもつ

た若い男たちであるというメッセージを老人と二老の「風水」の論議に託して故郷の若者に送ったのである。

ところで、沈從文は、その自伝の中で、『辺城』の舞台を茶峒に置いたことについて、次のように言っている。

我們先從湖南邊境的茶峒到貴州邊境的松桃，又到四川邊境的秀山，一共走了六天。六天之內，我們走過三個省份的接壤處，到第七天在龍潭駐了防。

這次路上增加了我經驗不少，過了些用木頭編成的渡筏，那些渡筏的印象，十年後還在我的記憶裡，極其鮮明佔據了一個位置。（邊城即由此寫成。）¹³

われわれは先ず湖南辺境の茶峒から貴州辺境の松桃へ行き、さらに四川から辺境の秀山へ行った。合計六日、この六日のうちにわれわれは三つの省の接合点を通過し、七日目に龍潭に達して駐屯した。

この途中で、私は少なからぬ経験を積んだ。材木で組んだ渡しの筏に乗ったことも何回かあったが、それらの渡しの筏の印象は十年後の今日なお私の記憶の中にきわめてはっきりと残っている。（『辺城』はこれによって書き上げたのである。）¹⁴

中世のロンドンの報酬を要求しないボートが『紅樓夢』の謝礼を取らない木の筏のイメージと重なり、『紅樓夢』の木の筏が茶峒の美しい木組みの渡しの筏と重なって、茶峒が桃源郷の舞台として浮び上がったのであろう。しかし、謝礼を取らないという一点だけは共通しているが、『紅樓夢』の無限に続く黒い川は『辺城』では清流となり、『紅樓夢』の著者がわざとらしく死を暗示する「木居士」「灰侍者」の操る木の筏は、『辺城』では慈悲深く気前の良い老人と純真な少女が管理する善意の渡し船となった。まるで紅樓夢の虚無思想の陰影を取り払おうとしているかのような設定である。

しかし、『辺城』の舞台茶峒は、俗に「三不管」と呼ばれる三つの省の接合点にある立地である。Phil Billingsley『民国時代の土匪』¹⁵によれば、このような地区は、桃源郷のごとく孤立したところで、それぞれの省の政府の施政が行き届かないために、無法者の逃れ場所、匪賊の根拠地となるのが昔からの伝統である。茶峒の木の筏についての印象を述べたあと、『従文自伝』は次のように続けている。

通過黔湘邊境時，我們上了一個高坡，名棉花嶺，……在嶺頭廢堡壘邊向下望去，一群小山，一片雲霧，那壯麗自然的圖畫，真是一個動人的奇觀。……在四川邊境上時，……又經過了一個古寺院，……寺院南邊一個白骨塔，穹形的塔頂，全用刻滿佛像的石頭砌成，徑約四丈。鍋井似的圓坑裡，人骨零亂，……聽寺僧說，是上年鬧神兵，一個城子的人都死盡了。

貴州湖南の辺境を通過する時、われわれは棉花嶺という高い嶺を登った。……その頂上の崩れた保壘から下を眺めると、群がる小山、一面の雲霧、その壮麗自然の絵巻物は奇観であった。……またある寺を通ったが、…寺の南のはずれに白骨塔があって、……寺の僧から聞いたところでは、前年の匪賊の乱で、一城全滅した町が出て……。¹⁶

このような匪賊の根拠地について触れた周作人の「抱犢谷の傳説」¹⁷（1925年3月）という一文もまた『辺城』の構想と関連するように思われる。周作人は、1923年5月山東臨城で起きた外国人を人質に取った列車強盗事件を起した匪賊孫美瑤が根拠地とした抱犢谷についての伝説を、18世紀の桂馥『札朴』の「郷里旧聞」から引用し紹介している。

蘭陵郡承縣有抱犢山。……相傳有人抱犢登其顛，結庵獨居，犢大，耕以給食。有田有泉，無求人世，亦小桃源也。

蘭陵県承県に抱犢山というのがあつた。……伝説によれば、子牛を抱えてその頂に登り草庵を結んで一人暮らしをする者がいた。子牛が成長し、田を耕し食糧が得られた。田畑も泉水もあり、世間に頼まない暮らしもまた、小桃源というものだ。

周作人がもう一つの文「抱犢谷通信」¹⁸（1925年2月）で言っているように、この桃源郷の美しい伝説は、「老牛舐犢」（老牛が子牛を舐めるように親が子をかかわいがる）という言葉を連想させる。これが、『辺城』の老人と「小さな獣のような」純真な翠翠の姿と重なる。『民国的土匪』によれば、匪賊の活動は清朝の崩壊後の政治的不安定の時期に一層活発になり、内乱の状況を一層複雑化させたという。沈從文は、『従文自伝』の中で、匪賊と土着軍の戦いの中で犠牲にされた無辜な農民の惨めな姿をつぶさに書き残している。そして、『辺城』で茶峒を描くことによって、無法と武力抗争を繰り返えず大地から美しい桃源郷への回復を呼びかけたのである。外敵の襲来を暗示する雷雨の襲来の後に建て直される白塔は、知識を重んじる新しい国づくりへの期待であり、渡し船は、Communismによる相互扶助の生活の回復を象徴しているように思われる。

¹ 『孟子』「公孫丑下」「天時不如地利，地利不如人和」

² 「十字街頭的塔」『語絲』第15期 1925年2月23日

³ 劉西渭『咀華集』「辺城」1936年12月初版、1947年三版、文化生活出版社 第72頁

⁴ 『魯迅全集』13、第339～342頁、魯迅先生記念委員會編、1973年初版、人民文学出版社

⁵ 『虛無郷消息』林徽音訳 上海水沫書店 1930年2月初版 『民国時期総書目・外国文学』、第73頁

⁶ 『沈從文全集』14、「『辺城』題識五種」、第438頁、2002年北岳文芸出版社

⁷ 星斌夫『中國社會經濟史語彙（正篇）』第92頁、昭和56年光文堂書店第三版、丁光『慕雅徳眼中的晚清中國（1861—1910）』2014年浙江大学出版社、第66頁

⁸ 胡泳の「閲読的未來」『読書』2011年第12期、三聯書店、第64頁

- ⁹ 「門外文談」『魯迅全集』6、第92頁、1982年人民文学出版社
- ¹⁰ 『沈從文全集』27、「解放一年——學習一年」第54頁、「自傳」第61頁、「時事學習總結」第64頁、「總結・傳記部分」第90頁、同上
- ¹¹ 『國初抄本原本紅樓夢』、第五回、1920年3月有正書局初版
- ¹² 『紅樓夢』伊藤漱平訳、平凡社、昭和53年
- ¹³ 「從文自伝」『沈從文全集』13、第343～344頁、同上
- ¹⁴ 「從文自伝」『現代中国文学全集』『沈從文篇』立間祥介訳、昭和29年
- ¹⁵ Phil Billingsley 『民国時代の土匪』1992年 上海人民出版社、第23頁
- ¹⁶ 「從文自伝」『沈從文全集』13、第344～345頁、同上、立間祥介訳参照
- ¹⁷ 「抱犢谷の傳説」『語絲』第16期、1925年3月2日
- ¹⁸ 「抱犢谷通信」『語絲』第12期、1925年2月2日